

●奨励賞【論文概要紹介】

生きる力を育てる食育の
あり方をさぐる

～I小学校における
学校栄養職員としての3年間の実践から～

愛知県知多郡東浦町学校給食センター
学校栄養職員

くぼたひろこ
久保田寛子

【実践の内容】

町内には小中学校が10校あり、学校給食はセンター方式である。この10校の中でも給食の食べ残しが最も多く、食事のマナーも大変悪いI小学校において4名の学校栄養職員が交代で、給食時の指導や食に関する授業を行った。I小学校は、外国人児童が1/3(全校300人)在籍し、家庭的に恵まれない児童も多く、家庭や地域の教育力が極めて低い。ここでの長期的、継続的な指導で食事のマナーや偏食を改善し、豊かな心と身体の成長を促す、さらに「自分のことは自分でやろう」という自立心や実践力を指導し、「生きる力」が育つことを期待した実践である。

【論文内容の紹介】

1. 主題設定の理由

学校栄養職員(以下、栄養職員とする)が児童の十分な実態把握をし、給食時の指導や食に関する授業において、学級担任と連携し、継続的に関わりをもつことで、児童の食事のマナーや偏食を改善し、心と身体の成長を促すことができると考えた。また、児童一人一人に自立心や実践力を育てるために、「生きる力を育てる食育のあり方をさぐる」という主題を設定した。

2. 研究の仮説

以下の3点を研究の仮説とした。

- ①給食時に一人一人の児童の食環境や実態に応じた栄養に関する一口指導をすれば、食事のマナーや偏食が改善され豊かな心と身体が育つであろう。
- ②学級活動の時間を活用し、食文化の違いや特徴に視点をおいた指導を展開すれば、外国人を含め児童全体の偏食が減少するであろう。
- ③学級担任とT・Tによる家庭科の授業で、栄養職員が専門知識を生かした指導をすれば、児童は学習の中で知識・技能を習得し、食への意欲が高まり、「生きる力」が育つであろう。

3. 研究の計画

仮説を検証するために、

- ①給食時における一口栄養指導
 - ②学級活動の時間における食の指導
 - ③家庭科の授業におけるT・Tによる指導
- 以上3点を実践した。

4. 研究の実践

給食時の学級訪問回数を重ね、食生活について声かけを続けた結果、食事のマナーは改善され、学級全体の食べ残し量は徐々に減少してきた。しかし、個々にはまだ問題を抱えていたこともあり、抽出児童を選出、評価規準を設定し、これらの児童との関わりを深めると同時に、全体のレベル向上もねらった。根気強く指導を続け、実践を重ねる度に、児童から聞かれる言葉、行動に変容が見られた。また、児童の家庭環境を考え、家庭ですぐに役立つ実践を繰り返した結果、児童の食に関する意欲の高まりも大いに見られた。

5. 成果と課題

3年間の継続した児童との関わりは、一人一人の実態を十分把握でき、指導をスムーズにし、変

容も見やすくした。継続指導の大切さを改めて感じることができた。実践当初に比べ、食事のマナーや偏食はレベルの向上が見られ、大きな成果が得られた。また、学級全体や抽出児童の変容から、豊かな心と身体の成長につながったと考える。

さらに、児童の食に関する興味・関心を引き出し、「自ら生きぬく力」を育てることができたと考える。今後I小学校のような状況を抱える学校も増えることが予想されることから、今回のような食育が一層必要になってくると思われる。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

教師の学びを高め、 子どもの学びを伸長 させる学校づくり

愛知県刈谷市立富士松南小学校 校長

すぎうら わたる
杉浦 渉

【実践の内容】

「学校が楽しい」という言葉が、子どもが学校を学びの場としてとらえ発せられたものになりたいと考えた。そこで、教育の中核である授業の創造に積極的に取り組む教師を育てることと、子どもの知的欲求の高まりを図り、自ら問いを發して学ぶ楽しさを学校に求める子どもを育てるという2つの視点に立って、実践をした。

【論文内容の紹介】

1. 教師の学びを高める

① 教師の力を結集する教育方針

教師集団が、一つの目標に向かって、教育を推し進めるには、まず、本校の目指す教育・授

業像・子ども像を全職員が共通理解することが重要である。そこで、画像を駆使し、教育方針のプレゼンテーションを行った。

② 教育方針を具体化する「校長通信」

教師を対象にした「校長通信-案山子の想い-」を平成17年度から発刊し、毎週、提出される先生方の週学習指導計画案に差し込んだ。そして、現在の子どもの育ちはどのようなか、課題は何かを具体的に伝えるようにした。

③ 教師の単元構想力の育成

教師の授業力の中核になるのは、単元構想力である。そこで、研究主題を設定し、ア：子どもの心を揺さぶるもの・事実・現象をどう提示するか イ：自分の考えの足場を固めたり、自分の考えを深化させる自己実現の場をどう位置づけるかを中心に研究した。

特に、単元構想を練り上げるスリー・ステップを重視した。

(ステップ1) 自由に単元の流れのアイデアを出し合う段階

(ステップ2) 子どもの心を揺さぶるもの・事実・現象を集積する段階

(ステップ3) 単元の練り上げの段階

④ 教師の学びの質を高める授業分析

教師に最も欠けているのは、「自分の授業を振り返る」ことである。そこで、授業を文字としておこし、「授業記録」を作成した。この授業記録をもとに、長期休業中に全職員で授業分析会を実施している。

2. 子どもの学びを伸長させる

① 覚える喜びを味わう「名刺チャレンジ」

校長は、700人の学校担任である。個と正対する「名刺チャレンジ」を平成17年度から実施した。「記憶する、覚える」という思考活動は、学びの重要な一分野である。学校朝会で、映像や実物を使って「今月の名刺チャレンジ」の課題を発表する。合格者には、校長手製の名刺を渡している。本年度の年間パーフェクト賞は660人近くになる勢いである。

② 生活科と連携した「植物名刺チャレンジ」

本校には多くの樹木がある。この環境を生かし、平成 17 年度から生活科「この木、なんの木、きになる木」の単元を仕組んでいる。自己中心的な低学年の目を多種多様な樹木に注目させるため、樹木の変化を写真に撮り、植物名と存在場所を問題にした「植物名刺チャレンジ」を行っている。これを契機に、植物の変化に鋭く向かうようになった。

③ 自然に問いかける「自然発見コーナー」

最初、樹木を中心にした教師の情報提供が主であった。しかし、子どもから様々な自然に関する情報が寄せられ、「自然発見コーナー」が毎週更新できるようになった。当初は、珍しいもの探しという意識が強かったが、徐々に問題追究へと学びの姿勢が変化してきた。そのため、全国的な理科研究コンクールで毎年入賞している。

●奨励賞【論文概要紹介】

既得経験からイメージを表現する概念形成

—算数科図形領域「円」を中心に—

岩手県下閉伊郡岩泉町立岩泉小学校

まえたかなこ
前田華奈子

【実践の内容】

子どもたちが主体的に考えながら、何かきまりを発見したことの喜びは、頭と心に深く刻み込まれる。発見するまでの軌跡は、次の何かを生み出す道標となり、また、発見した内容は、力のある知識となる。

そこで、「円」の概念形成に焦点をあて、内在している既得経験から、形成したい概念に関係する事象「まる」という形のイメージを表現し、

個人さらに集団で思考を発展させながら条件を整理することによって、児童自身で概念形成を図っていけるのではないかと考えた。連続して4年生の担任となったことで、3年間の比較研究をすることができた。

【論文内容の紹介】

1. 研究内容及び方法

「円」とは、最初から「円」の形があったのではなく、「中心」があり、そこから「等距離」にある点が集まってできたものである。ある定点、つまり円の構成要素である「中心」がなければ、円にはならないのである。

したがって、概念を形成するには、「中心」の必要性に気づくことが大切になる。

そこで、つぎのような手立てで実践をした。

- ①児童の既得経験から「まる」というイメージを表現し、条件を整理する学習展開をすること
- ②集団での思考を発展させながら学習展開をすること

2. 研究の実際

〈平成 17 年度〉

「『タイヤ』を画用紙で作るためには、どんな形にしたいか。」と導入。

結果として、円の構成要素である、「中心」「半径」を児童自ら発見することができた。

- 学習の途中から、仲間の考えを生かし発展させながら試行錯誤をしていた。
- 発見できた喜びを感じていた。
- △発見するまでに、時間がかかった。

〈平成 18 年度〉

「運動会で発表する表現運動の隊形はどのようにしたいか。」と導入。

再び、構成要素を発見できた。

- 次時に学習の結果が生かされていた。
- △動作で表現したのみ。図にも描くことで、イメージを明らかにすればよかった。
- △個々の考えを表すことなく、集団のみの学習で

あった。

〈平成 19 年度〉

平成 18 年度と同様に導入し、発見できた。

○動作と図でイメージを表現したので、個人の試行錯誤をすることができた。

○集団でよりよい方法を話し合ったので、全員で発見の喜びを感じることができた。

△動作、図の表現で時間がかかった。

3. 研究のまとめ

3 年間の本研究を通して、必要な構成要素を発見し、概念形成をすることができることが明らかになり、次のことを考えた。

①導入時の目的意識の必要性

「タイヤ」、「『きれいな』丸」など「円」のイメージに近い表現のものから試行錯誤する。

②仲間との考えの共有化の必要性

仲間の考えを聞きながら、その考えに自分の考えを積み重ね、よりよい考えができる。

③児童自ら発見することで刻まれる知識

じっくり悩みながら考えて発見した構成要素の算数の用語やその意味がしっかり刻み込まれ、その後の学習の理解や定着が深まる。

を廃止して新設された生活科学習の中ではどのように位置づけられてきたのであろうか。このことは、生活科から社会科への接続・発展という視点からだけでなく、生活科という教科としての必要性を真に考える意味においても重要なことである。

本実践では、生活科学習における公民的資質の基礎の育成を図るために、児童の思考力・表現力に焦点をあて考察を行った。

【論文内容の紹介】

1. 本実践での公民的資質の基礎とは

本実践で身につけさせたい公民的資質の基礎とは「私」と「公」である。つまり「自分」と「みんな」を意識させることが生活科学習の段階において大切であると考えます。

みんなのものやみんなで利用する場所を児童が実際に利用する活動を通して、「みんなのことを考えて行動する力」を低学年の段階で育てることが、公民的資質の基礎の第一歩であると考えました。

2. 研究の手立て

生活科学習においては、児童の思いや願いをもとにした体験活動は、児童の豊かな思考力や表現力を育む上で非常に重要である。

そこで、本実践では「生活科学習指導要領の内容(4) 公共物・公共施設」の単元において、体験活動をもとに公共施設での過ごし方を考えたり、学習対象として取りあげたいいくつかの公共施設を比較させたり、関連させたりして思考力を高めていく指導計画を構成した。また、表現力では、児童の表現活動を、作品の出来映えにとらえるのではなく、思考の延長としての表現力にとらえ、体験活動から得られた気付き(知識)を、他の公共施設へ応用・転化できるような指導計画を工夫した。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

「公民的資質の基礎」の育成につながる生活科学習の実践

山梨県中巨摩郡昭和町立常永小学校

わたなべしょうじろう
渡邊昭二郎

【実践の内容】

公民的資質の基礎の育成は、社会科学習の究極的な目標である。では、低学年社会科と理科

3. 単元構想

本単元では、町にある図書館と温泉の2つの公共施設を学習対象とした。2つの公共施設から、みんなで利用する場所ではどのように過ごしたらよいかを、実際に図書館へ行ったり、友達や先生と一緒に温泉に入ったりすることを通して具体的に考えた。さらに、体験活動後に気付いたことを話し合い、そこから分かったことを、次の活動である、バスや電車などの乗り方や動物園や公園などの公共施設での過ごし方に応用・転化することで、実生活で生きて働く力を身につけさせるようにした。

4. 考察

単元の終末では、「電車の中で席を譲ったり、大声を出さないように注意し合ったりする。」「ルールを守って動物を見たり、触れ合ったりする。」「人のごみも進んで拾う。」など、電車や動物園などで、温泉や図書館の体験をもとにして行動する姿が見られた。

今回の学習のように、具体的な場所で一人ひとりが自分のめあてを決め、できる限り実行しようとする態度が、児童の公共意識を高めて行くことにつながっていったのではないかと考えている。

生活科の課題として、活動そのものが学習の目的となりがちであるという指摘もある。そうならないためにも『単元で児童に身につけさせたい力は何なのか』ということ、もう一度教師が明確に意識することで、教科としての生活科の必要性が見えてくるのではないかと考える。